

# 白馬岳 柳又谷源頭部・大雪溪滑降

1994. 5. 2~3

佐藤 晶彦 他1名

当初の予定では、横尾をベースに槍・穂高で滑ろうと考えていたが、週間予報では4日、5日の天候が思わしくなく、色々迷った末、5月1日~3日でアプローチの短い白馬岳周辺での山スキーを行うことにした。

5月1日(日) 雨 白馬滞在

久しぶりの新宿発の夜行、連休だというのに最終の快速松本行は、拍子抜けするほどガラガラだ。茅野を過ぎると、一人ワンボックスでゆったりと寝て行けるのだが、暖房を入れてくれないのでけっこう寒い。大糸線に乗り換え、大町を過ぎるところから雨になる。白馬駅を降りても雨は降り続いており、止みそうな空模様ではない。今日から動き出した猿倉行きバスがすぐに接続していたが、この雨の中を行動する気になれず、駅の待合室で天候待ちとする。天気が良ければどこか一本滑ろうと考えていたが、最悪でも今日中に猿倉に入れば良いのだ。

駅前をブラブラしていたら、4年前の文部省登山研修所の遭難救助研修会でお世話になった長野県警山岳警備隊の白田さんに再会した。観光案内所兼登山指導所に招かれ、お茶をいただきながら話しているうちに、「今日は雨でダメだろうから、オレの家に来て飲もう」ということになり、お言葉に甘えることにする。白田さんは昨日、爺ヶ岳で遺体収容に出ており、今日明日は休養日ということだ。午前中から宴会になってしまったが、4年前の思い出話だけでなく、遭難救助や遺体収容の貴重な体験談をうかがうことができ、命の重さを教えられた。

午後になって雨は小降りになってきたが、山は相変わらず雲の中だ。今晚は、山岳警備隊の詰所に泊めていただくことになり、白田さんにお世話になりっぱなしの一日であった。

5月2日(月) 曇り 猿倉→大雪溪→白馬山荘

朝方まで雨が残り山々も雲に包まれているが、明日の3日は天候回復の予報である。上部まで上がっておけば明日は何とか楽しめるのではと期待して出発する。白田さんの車で猿倉まで送ってもらう。天候が悪い

にもかかわらず、猿倉山荘前の広場にはマイカーが多い。今年の北アルプス一帯は雪が少なく、山荘まで完全に除雪されていた。

山荘の横にテントを張って、余計な荷物は置いて行く。一段上がって林道沿いにシールで登りだす。8℃と気温が高い。白馬尻まで約1時間、時折ガスが切れて雪渓下部が見渡せ、ポツリポツリと登山者が見える。金山沢の下部も広くて気持ち良さそうだが、急な上部核心部は観察できない。冷たい風が出てきてカッパを着込む。大雪渓下部はデブリ、小石などが多く、登るにも滑るにも快適とは言い難い。傾斜がきつくなる前に小休止を取り、岩室付近からはスキーを引き擦ってアイゼン・ツボ足で登る。荷物が軽いので快調に登ってきたが、次第に雪渓を吹き下ろす風が強くなり、ペースが鈍ってくる。視界は100m位だろうか。ルートは沢状で、踏み跡も多いので迷うことはない。

村営頂上宿舎に着き稜線に上がると、富山側からの風が一段と強くなり、時折突風となって前進を阻むようになった。営業しているのは上の白馬山荘なので、ここまで来たらもう少し頑張っって小屋に入るしかない。稜線上は雪が飛ばされて夏道が出ているが、かまわずスキーを引き擦って行く。時々スキーが風にあおられ、よろけたり、転倒したりで非常に歩きにくい。たまにガスが切れて、山荘が見え隠れするようになったが、あと少しがなかなかかどらない。山荘まで100m、突風にあおられたスキーが片方、ザックから外れた。もう少しだからスキーは手で持って行こうと両方のスキーをザックから外して抱えたのが間違いの元だった。左脇に抱えて歩きだした途端に突風に吹かれ、板への風圧に耐えられずに右へ側転一回転、板を放り出してしまった。片方の板はすぐ下に落ちていたが、もう片方の板が右下の雪の斜面を滑りだし、ガスの中へと消えて行ってしまった。ここまで登ってきながらスキーを流してしまうとは何という不注意。強風と悪天の中で探す気にもなれず、ともかく山荘に入る。落ちたのは大雪渓側なので、スキー捜索は明日の天候回復を待ってとしよう。自分が落ちなかっただけ幸運というものだ。

タイム：猿倉900→白馬尻1000/15→2100m1130/50→2630m1400/15→白馬山荘1515(1泊2食税込み7828円)

柳又谷源頭部

5月3日(火) 薄曇り 滑降→大雪渓滑降→猿倉

頑丈な造りの小屋だが、一晩中吹き荒れた強風にガタガタと鳴っていた。朝になって風は弱くなり、薄日もさすようになった。朝飯前に頂上を往復する。風は比較的強いが、昨日に比べればそよ風みたいなものだ。気温が高いので冷たさを感じない。白馬頂上にくるのは久しぶりだ。北面の雪倉、朝日はよく眺めることができたが、剣、立山は見えず、南面も白馬鑓ヶ岳までがやっと見える程度だ。

朝食を取った後、連れを残して早めにスキー搜索に小屋を出る。スキーを流した地点から下を眺めてみると丁度よく窪みがあり、いって見ると窪みの側壁にスキーが突き刺さっていた。ラッキー、ラッキー。流されたのは距離にして100mもない。あと10mも下にずれていたら、完全に流されていただろう。

意外に早くスキーが見つかったので、少しこの辺で遊ぼうと柳又谷源頭部に滑り込む。小屋のすぐ下から残雪を拾いながら滑ることができた。雪の緩み具合は丁度良く、白馬岳、旭岳の岩壁を眺めながら、広大な斜面を二人だけで占領しての滑降は最高だ。鉢ヶ岳の頂上付近は日が照りだしたが、旭岳は黒い雲におおわれてしまった。天候悪化が早いと判断し、2530m付近まで滑り降りて登り返す。まだまだ良い斜面が続いていて後髪が引かれる思いだが、昨日の様な天気になってしまっただけは大雪山滑降が楽しめない。スキーが見つかって遊べたのだから贅沢は言えないだろう。

稜線に登り返してみると、富山側に雲が多いだけで信州側はスキッとしないものの穏やかな天気、鹿島槍がうっすらと見える。もう少し滑れたかなと少し後悔するが、また来ることにしよう。気温が高いので雪の緩みが早いようだ。すぐに大雪渓滑降に入る。上部の急斜面は滑りやすく、快適に飛ばす。下るにつれて正面の杓子岳が大きく立派になってくる。2500m付近で左に回ると大雪渓全体が見渡せ、天気が回復し、多くの登山者が上がってくるのが見える。岩室を過ぎるころから雪はグシャグシャになり、デブリと小石も散らばっていて滑りにくい。

傾斜が緩くなった所で休憩、昨日は寒くて飲む気にならなかったワインとチーズを滑りに影響しない程度に楽しむ。デブリと落石を避けながらどんどん高度を下げ、10時過ぎには猿倉に着いてしまった。のんびりと少し早めの昼食を取り、テントを撤収して丁度よく上がって来た夕

クシーで白馬にもどった。

駅前の道を10分程歩いた左手には公共温泉浴場「みみずくの湯」があり、ここで山行の汗を流した。少し霞んでいるが浴室の窓から白馬三山が眺められ、降りてくるのが早過ぎたようだ。すぐそばに派出所があり、待機中の白田さんに下山のあいさつに行く。今日も2件の滑落・転落事故があったそうで忙しそうである。普段は気がつかないが、白田さんのような登山の安全を守ってくれる人々がいるからこそ、我々も安心して山に行けるのだろう。遭難者と救助者という関係ではなく再会することを約束し、ガラガラの特急あずさで白馬をあとにした。

タイム：白馬山荘800→柳又谷2530m810/20→白馬山荘直下850/900→大雪溪2180m920/45→猿倉1020

データ：タクシー（猿倉→白馬3000円、スキー1台100円）、みみずくの湯入浴料400円

